桜の花びら舞う夜に

紅桜陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜の花びら舞う夜に

【Ｎコード】
Ｎ９９１８Ｆ

【作者名】
紅桜陽炎

【あらすじ】
美少女姉妹に囲まれ過ごす矢賀慶大。喧嘩したりイチャイチャしたりと、近所から苦情が来る（？）くらい騒がしい日々。そこに現れた一人の転校生により、慶大の周りは更に騒がしくなっていく。
（ただ今、込み入った事情により、更新が出来なくなっています。それが落ち着き次第、即効で更新を再開しますので、ご了承下さいｍ（＿＿）ｍ）

第一話：騒がしい朝（前書き）

初めて「小説」を書くので、かなり違和感みたいなものを感じるかとは思いますか、どうか温かい目で見守って下さいｍ（＿）ｍ

それから、後書きで人物紹介をしますので、是非ご覧下さい。

第一話：騒がしい朝

「ジリリリリリリ！」

けたたましい音が、俺の安らぎの時間を奪う。

「…うっせぇな…もう。…ん？…ああ、もうこんな時間か…。起きっか、しゃーねー。」

もぞもぞと布団からはい出た俺は、重たい体を引きずり、死人のような顔のまま、洗面所に向かった。

俺の名前は矢賀慶大（やがけいた）。地元の学校に通う、高校一年だ。顔は普通、彼女はいない。学力も体力も人並み。生粋の普通人だぜ。

氷のような冷たい水で顔を洗っていると、誰かが後ろから抱きついてきた。

「おにーちゃんっ！おっはよっ！」

「ああ、おはよう、里沙」こいつは俺の兄弟のうち、次女の里沙（りさ）。私立の中学に通う二年生で、かなりのやんちゃだ。いつも俺に抱きついてくる。

それにしてもかわいいよなぁ。くりくりした目に、サラサラのセミロングの髪。プルンとした唇は、全国の男達を誘惑しているようだ。これだけかわいいのだから、当然多数の男子に告白されているのだが、全員断ってきたらしい。いや～、不思議だ。

いつの間にか自分の世界に入っていた俺は、里沙の声で現実に引き戻された。

「お兄ちゃん？何ぼーっとしてるの？」

「あ、ああ。いや、何でもないよ。さっ、朝飯食おうぜ。」

「うんっ！」

抱きついている里沙を引きずったまま、俺はリビングに入った。すると、二人の美少女が既に座っていた。

「おはよう。奈々、綾姉」
「おはよう、慶大、里沙。あらあら、里沙はまた慶大に甘えてるのね？」
「うんっ！お兄ちゃん大好きだもん！」
「ありがと、里沙。俺も里沙の事大好きだよ。」
俺は里沙の頭を撫でながら言った。
「ふんっ。ロリコンが。」
「お、おい奈々！？何でそんなに不機嫌なんだよ？」
「別に。不機嫌なんかじゃないわよ？ただ、思ったままの事を言っただけよ。」「ウフッ。奈々ったら…。私も甘えたいって素直に言えばいいのに。」
「ち、違うわよ！なんでこんなロリコン変態馬鹿兄貴に甘えなくちゃいけないのよ！」
（変態って…。俺別に何にも変態な事してなくね？）
「奈々、それは流石に酷くないか？」
「ふんっ！全部本当の事じゃない。」
「お前なぁ…」
「はいはい、二人ともそこまで。早く朝ごはん食べなさい。さもないとお父さんに言い付けるわよ？」
「そうよ～。早くたべよ～よ～。私お腹空いたぁ。」親父ははっきり言って化け物だ。空手、剣道、柔道、ボクシング等の実力は、全てプロ級だ。逆らったら、それこそあの世行きなので、ここは言うことを聞くことにした。

「ごちそうさま。んじゃ綾姉、行ってくるわ。」
「行ってらっしゃい。あ、奈々も早くしなさい。あなたもでしょ？」
「分かってる。今行くわよ。」
まだ不機嫌なのか、奈々は頬を膨らませたまま、玄関まで来た。
「さ、行くわよ馬鹿兄貴。」
（だから馬鹿兄貴はやめろって…。）

「「行ってきま〜す！」」

第一話：騒がしい朝（後書き）

改めてご挨拶させて頂きます、紅桜陽炎です。　　それでは人物紹介をさせて頂きます。

慶大（けいた）　地元の高校に通う一年。生粋の普通人で、彼女無し。矢賀（やが）綾（あや）　有名な某大学に通う四年生。サラっとしたロングヘアが印象的な超美人。父がめったに帰らず、母も週一くらいでしか帰らないので、家では母親的存在。温厚な性格。

矢賀奈々（やがなな）　慶大と同じ高校に通う一年生。あまり髪を伸ばしたがらず、いつもショートヘア。所謂ツンデレの美少女で、慶大には特に厳しい。

矢賀里沙（やがりさ）　私立の中学に通う二年生。中二にも関わらずとても甘えん坊で、いつも慶大に抱きつく。セミロングの髪が特徴で、人懐っこい性格。

第二話：転校生現る！（前書き）

前話の後書きがおかしくなっている事、お詫びします。それでは、第二話です。どうぞ。

第二話：転校生現る！

閑静な住宅街。そこを歩く二人の男女。だが、二人は喋ろうとしない。
すると、沈黙に耐え兼ねたのか、男の方が口を開いた。
「なあ、なんでそんなふて腐れてんだよ？」
「別に。」
「じゃあ、もうちょっと明るくなってくれないか？これじゃ、気まず過ぎるって。」
「…。」
はぁ、何でこの子はこんなにも俺に冷たいのでしょうかねぇ？もうちょっとでも優しかったら、ほんっと可愛いのにねぇ。
「どうせあたしは、冷たくてがさつで可愛くない女の子ですよ！ふんっ！」
「ふぇ！？」
何故俺の考えてる事が分かった？これがテレパシーってやつか？そうなのか？神様教えくれ！
心を読まれあたふたしている俺をよそに、奈々はすたすたと歩き出し先に行っててしまった。
「お、おい！ちょっ、待てって！…。はぁ…。行っちまったよ…。」
仕方なく、俺は一人寂しく学校へと向かった。

「ちょり～す」
「ちあ～」廊下で、すれ違う友達とテキトーな挨拶を交わした後、俺は教室に入った。
「おはよ～」
「おっ！慶大！来た来た。おい！ＢＩＧＮＥＷＳがあるぜ！聞きたいか？なあ？聞きたいよなぁ？」
「んあー、もう、っるせぇな大樹。朝からギャーギャー騒ぐな。」

このうるさい馬鹿は、金橋大樹(かねはしたいき)兎に角よく喋るので、みんな欝陶しい存在としている。だが俺は、こいつが根はものすっごい友達思いなのを知っている。っつーことで、こいつは俺の中では親友的な位置にいる。

「んで？何？」

「おう！聞きたいか！実はなぁ、今日俺らのクラスに転校生が来るんだってよ！しかも女子だぜ！？どうだ？驚いたろ？」

「ふ～ん。そ～なんだ。」バシッ！

突然俺の頭がジンジン言い始めた。

「んだよ！？何で叩くんだよ？」

「ったりめぇだろうが、バッキャロー！少しは驚けや！転校生だぜ？転校生。」

「ま、普通じゃねぇの？今6月だし。なんか、ちょうどそんな時期なんじゃね～の？」

「へっ！まあ、いいや。んじゃ、もうすぐ先生来るし、また後でな。」

そう言って、大樹は自分の席に戻って行った。ちょうどその時、先生が入って来た。

「ほら～、席に着け～！」ガヤガヤと騒いでいたクラスメイト達が、ゾロゾロと席に着いた。

「よ～し。知っている奴もいるかもに知れないが、今日、このクラスに転校して来た生徒がいる。」

「先生～！男子ですか～？女子ですか～？」

男子の一人が聞いた。

「おう！女子だ。はしゃぐなよ、男子。」

「「ひゃっほう！！」」

とたんにクラス中の男子が騒ぎだした。俺一人を除いて。

すると、俺の前に座っている女子が話し掛けてきた。

「あれ？矢賀くんははしゃがないの？」

「まあね、よくある事だし。別に、すんげー美少女が来る訳でもないだろうし」

「ほらー！少し落ち着け男子！さあ、佐沢入って来てくれ。」

ガラガラ。ドアがゆっくりと開いた。途端にクラス全体が黙った。
そして俺の予想は１８０度変えさせられた。
「佐沢理香です。よろしくお願いします。」
入って来たのは、まさに絶世の美少女だった。

第二話：転校生現る！（後書き）

今回は二人人物紹介です。金橋大樹（かねはしたいき）：慶大のクラスメイト。慶大とは中学からの付き合い。よく喋り、うるさいが、根は物凄く友達思い。彼女はいない。慶大の親友。佐沢理香（ささわりか）：慶大の高校に転校してきた絶世の美少女。どちらかというと大人しい性格だが、詳しいことは分からない。

第三話：一つの輪（前書き）

何だが、この物語、相当長くなりそうな気が……。まあそれでも、頑張って書きます！

第三話：一つの輪

「「か、可愛い～！！」」クラス中の男子が口を揃えて叫んだ。今度は俺も含めて。

彼女は何処をどう見ても完璧な美少女だった。ほんの少し茶色を含んだクリっとした目、少し高めの鼻、プルンとした可愛い唇。また、体型も、程よい身長に、成長し膨らんできた胸、すらっと長い足。そんじょそこらのアイドルより、よっぽど可愛い。

「佐沢はご両親のお仕事の都合で、この町につい最近引越してきたばかりだ。みんな、仲良くするように。いいか？んじゃ、佐沢の席はっと……。お、矢賀、お前の横、空いてるよな？」

「はい。」

「よし、じゃあ佐沢、矢賀の隣に座れ。」

いや～、あんな美少女が俺の隣に座るなんて、まるで小説みたいな展開だな。ここから新しい恋が始まってゆ……！？

あれ？男子の皆さんが、獲物を捕らえる獣のような目でこちらを見ていますが？マジ怖い、ホント怖い。

すると、佐沢が俺の隣に座った。そして、天使の様な笑顔で挨拶をしてきた。

「よろしくね！矢賀くん」

「お、おう。」

そして俺は、昼飯の時間までずっと、その天使の顔を見つめていた。

キーンコーンカーンコーン昼飯になると、誰もが予想していた通り、佐沢の周りに人だかりが出来た。お陰で俺の机まで占領されてしまった。仕方ないので、俺は屋上で食べることにした。

ガチャ。屋上のドアを開けると、まだ、誰もいなかった。そこで俺は、校庭が見下ろせる場所に座った。

「はぁ……。ここはのどかでいいなぁ。佐沢、今頃質問責めなんだろうなぁ。」それにしても、佐沢って、ホント可愛いよなぁ……。てか、俺の周りって美少女だらけじゃん！俺の姉妹は三人とも美少女だし。隣の席には、佐沢がいるし。なんか、俺、幸せ……。

「何ぼけ～っとしてんだよ？」

「こんにちは！慶大くん」

「おう、葉月、翔太、どした？」

こいつらは、宮野葉月（みやのはづき）と青野翔太（あおのしょうた）二人とは幼馴染みで、小学生からの付き合いだ。

「どうしたもこうしたもねえよ。お前のクラス、すんげ～可愛い転校生来たんだろ？」

「ああ。佐沢な。それがどうかしたか？まさか、学年1イケメンな翔太様は、佐沢をロックオンですかな？」

そう、翔太は学年の中で1番のイケメンだ。しかも、頭脳明晰、運動能力抜群とあって、その人気はファンクラブが出来る程だ。

「バーカ、ちげーよ。転校生が来たっつったら誰だって気になるじゃねえかよ」

「まあ、いいや。そんなに気になるんだったら、教室来いよ。質問責めに遭ってるだろうから。」

そして、俺達は教室に着いた。案の定、佐沢は質問責めに遭っていた。

「あれが佐沢かぁ。すんげー美少女だな。よし、声掛けに行こうぜ。」

「ちょ、待てよ！俺だってまだ話し掛けてねえんだぜ？抜け駆けは許さんぞ」

「何？お前隣の席なのに声掛けてねぇの？チキンだな～」

「うるへ～！そんなに言うなら今声掛けてやる！来いよ！」そして俺らは教室に入った。

「あ、青野君！」

「青野君が来たわよ！」
途端に青野目当ての女子が騒ぎ始めた。俺らはそれを無視し、佐沢の席に向かった。
「さ、佐沢さん。今ちょっといいかな？友達を紹介したいんだけど」
「は、はい。いいですよ」俺達は騒がしい教室を出て、廊下で話すことにした。
「紹介するね。このイケメン野郎が青野翔太。このやんちゃ娘が宮野葉月。二人共俺の幼馴染み。よろしくね。」
「葉月って呼んでね、佐沢さん！」
「俺の事も、翔太でいいよ。よろしくな」
「あ、ついでに俺も慶大でい……ゴフ！！ってえ！何すんだよ翔太！」
「お前はいいんだよお前はよ」
「いいじゃねえかよ！俺だって佐沢さんと仲良くなりたいんだから」
「今は俺と葉月を紹介する立場だろーが。後にしろ後に」
「んだとぉ？」
「ウフフ……。仲が良いんですね」
「……え？ああ、まあ…ね。仲が良いっつーか腐れ縁っつーか」
「ありがとうございます、皆さん。私、正直不安だったんです。この学校で上手くやっていけるかって。けど、皆さんが優しく接してくれたお陰で、少しほっとしました。ありがとうございます。これからよろしくお願いします。」
「気にしないでよ」
「そ。気楽にいこうぜ」
「はい！」
こうしてここに、一つの輪が完成した。

第三話：一つの輪（後書き）

なんだがものすご～いベタになってきた…。しかも、所々グダグダになって…。ま、気にせず続けます！今日中にもう一話更新する…予定です…。

第四話：味噌汁という名の劇薬（前書き）

矢賀家での、のほほんとした朝の風景です。かなり短い文です。

第四話：味噌汁という名の劇薬

佐沢が転校してきてから一ヶ月が経ち、彼女もだいぶ学校に慣れてきたようだ。しかしその一方で、佐沢に告白する男子が増えてきた。最初は、学校に戸惑っていた彼女にいきなり告白はまずいだろうと、みんな遠慮しがちだったが、慣れてくると、みんな積極的に告白するようになった。しかし、佐沢はその告白をことごとく断っているらしい。

俺はというと、いつものように平凡な日々を送っている。

「ジリリリリリ！！」

「んーー！！ああ～。あ～、マジ眠ぃ」

俺は、眠たい目を擦りながらリビングへと降りて行った。

「おはよー。あれ？おい奈々、綾姉と里沙は？」

「おはよう。綾姉は大学に用事で、朝一で出掛けてった。里沙は昨日から友達の家に泊まってるわよ」

「ふ～ん……？ちょ、ちょっと待てよ？ってことは今日の朝飯は……？」

「あたしが作ったに決まってるでしょ？さ、もう出来てるわよ。早くしなさいよ」

……。俺はこの時死を覚悟した。そう、奈々の料理はホントにまずいのだ。魔女がグツグツ煮ているあの紫色の液体、あんな感じだ。

「ほら、早く食べなさいよ。お味噌汁冷めるわよ」

奈々が

「お味噌汁」と言ったその液体は、もはや茶色ではなくなっていた。何で味噌汁が茶色じゃないんだよ！味噌の跡形もねぇじゃん！はぁ……。さあて、死にませんように。

「いただきます」

ズズズー……。コト。

「ど、どう？美味しい？」奈々が不安そうな表情でこっちを見つめ

てきた。なので俺は、満面の笑顔で言った。
「うん！美味いよ！」
「……！そ、そうよね！私が作ったんだから、美味しいくて当然よ！」
奈々は、頬を赤らめながら言った。
それから十数分、俺は生死の淵をさ迷い続けた。

第四話：味噌汁という名の劇薬（後書き）

ちなみに俺は、ちゃんと味噌汁作れます！1番美味いのは、わかめと玉ねぎ（もしくは大根）の味噌汁。あれマジ美味い！

第五話：暴行事件編　（前編：始まりは朝のニュースから）（前書き）

暴行事件編突入です！少し疲れた中での執筆だったので、所々グダグダな所もあるかもしれませんが、ご了承下さい。次回はちゃんとまともなのを書きます！次回は少し長めに書こうと思います。

第五話：暴行事件編　（前編：始まりは朝のニュースから）

生死の淵から舞い戻ってきた俺は、学校に行く時間までの間、テレビを見て暇を潰すことにした。
（はぁ、それにしても、さっき赤くなった奈々の顔、ちょっと可愛かったかも）
「……。次のニュースです。茜坂町で、またもや暴行事件の犠牲者が出ました。犯人は、１５～２５歳の若い女性ばかりを狙っており、今回で犠牲者は５人となりました。犯人は鈍器のような物で犯行に及んでいます。お気をつけ下さい。犯人の特徴は……」
「ふ～ん。茜坂町でねぇ……？あれ？茜坂町って、隣町じゃね！？おい奈々！茜坂町って隣町だよな！？」
「そうだけど、どうかしたの？」
「このニュース見ろよ」
「ああ、この暴行事件ね？まあ、あたし達は大丈夫じゃない？事件は隣町でだし」
「人事じゃないぜ？犯人がいつこっち来るか分かんないし。お前だって一応若い女性なんだからさ」
「一応って何よ一応って！まあ、いいわ。心配してくれてありがとう。気をつけるわよ」
「ま、いざとなったら一緒に下校してボディガードになって、お前を守ってやるから大丈夫だよ」
「……。ありがと……」
「……うん」
なんか、お前を守ってやるなんていう台詞を言った俺は恥ずかしくなり、それを隠すかのように、学校に行く用意をした。
学校に着き、いつものように机に突っ伏して寝ていると、ホームルームが始まった。何かを決めているようだが、意識が薄い俺には、何を言っているのかさっぱり分からない。

「……。はい、というわけで、文化祭実行委員は、佐沢さんと矢賀くんに決定しました」
パチパチパチ。拍手が起こる。
「……んー？あー。なんでみんなぁ拍手してるんですかぁ～？」
俺は寝起きの腑抜けた声で言った。すると俺の後ろの男子がニヤニヤしながら言った。
「お前、文化祭実行委員に選ばれたんだぜ？ククク……。よかったなぁ？ま、佐沢さんと一緒っつーのが気にくわないけど」
「はい～！！？」
「おうどうした？大声出して。何か言いたい事でもあるのか？」
「い、いえ。何でもありません」
俺はそう言いながら、椅子に崩れ落ちた。はぁ、よりによって文化祭実行委員かよ……。
そう、文化祭実行委員とは、その名の通り文化祭の実行を指揮する委員なのだが、学校の全ての委員会の中で1番仕事の量が多く、毎日残される羽目になる。また、文化祭当日もあまり遊べないため、みんなに敬遠されるのだ。
「はぁ、クソ面倒くせぇ」
「よろしくね！矢賀くん」佐沢が、その天使のような笑顔で言った。
ま、佐沢と一緒だし、いっか！！

第五話：暴行事件編　（前編：始まりは朝のニュースから）（後書き）

次回更新は、明日の夜になりそうです。

第六話：暴行事件編　（後編：暗い夜道で…）（前書き）

更新が一日遅れてしまいました。申し訳ありませんでしたm（__）m
それでは、暴行事件編後編、お楽しみ下さい！

第六話：暴行事件編　（後編：暗い夜道で…）

放課後になり、生徒達が、帰宅したり部活に勤しんでいる頃、俺は、狭苦しい会議室で、役員やら何やらを決めていた。
（ああ～、だりぃ～。早く帰りてぇ～。あと数分で終わってくんねぇかな……）しかし、そんな願いもむなしく、会議は5時半頃まで続いた。終わった頃には、日が沈みかけていた。
会議が終わった俺らは、教室に戻って帰宅の準備をし始めた。そして、いざ帰ろうとした時、不意に佐沢が声を掛けてきた。
「あの…、矢賀くん…、ちょっといい…？」
「……え？あ、うん」
「今日の委員会で言われた、各クラスが必ず作るっていう旗の事なんだけど、早めにHRでみんなに提案しといたほうが良いから、今日のうちに、いくつか案を考えておきたいんだけど、少し残ってもらっても大丈夫？」
「ああ、校舎の壁に垂らすっていうあれね？いいよ。まだ時間あるし。よし、んじゃ、ぱっぱと決めちゃおう」
「うん。あのね、私さっきいくつか思いついたんだけど……」
そして、俺達はこの後更に遅くまで残り、話し終わった頃には完全に暗くなっており、時計をみたら7時を回っていた。
「んあ～！！やっと終わったぜ～。ってか、もうこんな時間じゃん！！」
と、その時、教室の扉が開いた。そこに立っていたのは担任だった。
「おい、お前ら。まだ残ってたのか？もうこんな時間だぞ。さっさと帰れ」
「「はい……」」
「あ、それと矢賀。こんな時間まで女の子を残らせた罰だ。佐沢を送っていけ。いいな？」

それは違うと言いかけた佐沢を遮り、俺は了承をした。
先生が立ち去った後、佐沢が不安そうな目で俺を見ながら言った。
「ホントに大丈夫なの……？」
「別に全然大丈夫だって。俺の事は気にすんなって。それよか、暗い夜道を女の子一人で歩かせる方がよっぽど良くないって」
「……ありがとう」
「いいって。さっ、帰ろうぜ！」
「うん！」

それから俺らは、暗い夜道を並んで歩いた。
「つーかさ、佐沢ん家って何処？」
「えっと、茜坂町ってとこ」
「……。やっぱ俺、送るべきだったわけだ」
「え？どういうこと？」
「ニュースでやってんじゃん。茜坂町で暴行事件って。しかも、狙うのは若い女性ばかりって」
「……！知らなかった」
「まっ、そゆことだから、家まで送るよ」
「……ホントにごめんね。ありがとう…」
「だから、気にすんなって！」
すると、佐沢は少し目に涙を浮かべながら俺を見て言った。
「矢賀くん……、優しいのね……」
「え……、あ、うん。ありがと……」
その後しばらくお互い黙り込んで、沈黙が続いた。

お互い何も喋らずにしばらく歩いていると、大きな公園に着いた。
「こんなとこに公園なんてあったんだ。なあ、佐沢、少し休んでいこうぜ」
「……うん」
「じゃあ、ごめん。俺ちょっとトイレ行ってくるから、ベンチに座

って待っててよ」
「……うん。分かった」
この時俺は、トイレに行くべきではなかったということは、知るよしも無かった。

トイレが終わり、俺は佐沢の姿を捜した。
「お～い佐沢～。あれ、どこにもいねぇなあ。どこ行ったんだ？」
暗い夜の公園で、女の子が一人になっているという現状に少し焦りを覚えた俺は、必死になって捜した。すると、公園の外の方から何やら話し声が聞こえた。
「……！……。……」
「……」
（もしかして、佐沢か！？だとしたら……）
最悪の事態が一瞬浮かんだが、そんな事はあるはずないと言い聞かせながら、声のする方へ向かった。

声のする方へ近付いて行くと、段々と会話が聞こえてきた。俺は、木陰に隠れて様子を伺った。
「……！や、やめて……！い、いや！」
「グヘヘ……。ニヒヒ…」
「だ、誰か…、助けて……！」
「……グヒヒ。ヘヘ」　佐沢は、いかにも異常者と思われる男に襲われていた。佐沢が着ていた制服は引き裂かれ、その白い肌と下着が見えていた。俺はすぐにでも飛び込んで助けに行きたかったが、男が持っているものが、それを躊躇させた。

男はナイフを持っていた。
（や、やばい。あいつ、ナイフ持ってる。ってか、暴行事件の犯人が持ってるのって鈍器じゃなかったのかよ？）
そうやって俺が躊躇している間にも、佐沢は更に服を引き裂かれ、

とうとう下着だけになってしまった。
（どうする？どうしたらいい！？いや、どうしようもないじゃないか！今近くにいるのは俺一人。助けられるのは俺しかいないんだ！やるしかないんだ！）
俺は近くに捨ててあった傘を手に取り、木陰から飛び出して男目指して走り出した。
「やめろ～！！！」
俺が飛び出して来たことに気付いた男は、ナイフをこちらに向けた。
（やばい！……でも怯んじゃいけない！！佐沢を助けるんだ！！）
「うおーー！！！！！」
俺は、剣道のつきの要領で、男の腹目掛けて傘をついた。しかし、男はそれをヒラリとかわし、俺の腹に蹴りをいれてきた。
「ぐはぁ……！」
「や、矢賀くん！！」
「グヒヒヒ……！邪魔するなぁ……！」
男は不敵な笑みを浮かべながら、再び佐沢に刃物を向けた。
「ヒヒ……！そろそろ本番といくか……」
「や、やめ……！い、痛い！！」
男は佐沢の綺麗な髪を乱暴に掴んだ。そして……、
バシッ！！
「痛い！！やめて！！」
男は佐沢の顔を思いっ切り叩いた。
（く…そ…。体が…動かねぇ……）
そして、体が動かず倒れている俺を尻目に、とうとうナイフが佐沢の肌に触れた。
「い、や、もう……ホントに、やめ…て…！」
（くそ……、くそ……、動け、動け動け動け動け動け動け……）
「動け～～！！！！」
男がこちらに気付いた。だが、俺は無我夢中で男のふところに飛び

込んだ。
「うおら〜〜！！！！」
突然のことに驚き、また、距離も近かった為、今度は避けられることなく、男に組みかかった。そして、もつれあったまま、二人一緒に倒れた。
ドサッ！
倒れた時に頭を打ったのか、男は気を失っていた。

俺は佐沢の怪我を確認するため、起き上がり、佐沢の所に向かった。
「よっこい…しょ。おい！佐沢大丈夫か？」
「や、矢賀くん！うん。私は大丈夫……！や、矢賀くん！！その怪我……！！」
「ん？」
俺は、佐沢の指注した俺の腹を触ってみた。すると、何か生温かい液体に触れた。
血だ。
恐らく、もつれあって倒れた拍子に、男が持っていたナイフが刺さったのだろう。すでに、俺のズボンにまで染みていた。
（そういえば、さっきから少し……、いし…きが…朦朧と……して……）
さっきまでは、佐沢の事が1番に気になっていたため、血に気付かなかったが、出血を意識した瞬間から、クラクラし始めた。
そして俺は、再び地面に倒れた。
「…賀くん！！……！」
佐沢の声が遠くに聞こえたが、それに答える事が出来ず、世界が暗闇に包まれた。

第七話：暴行事件編　（終編：First Kiss On Bed）（前書

次話から新章に入ると思います。

第七話：暴行事件編　（終編：Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ　Ｏｎ　Ｂｅｄ）

「……賀くん。矢賀くん……」
（あれ……？誰かが……俺の名前を呼んでいる……？）
声の主を確かめようと、俺はゆっくりと目を開けた。すると、真っ白い天井が目に入った。どうやら、屋内らしい。
「……？ここ……、病院……？」
「……！矢賀くん！？矢賀くん！？気が付いたの！？」
「……ん？……佐沢？」
「うん！そうだよ！」
そう返事を聞いた瞬間、今までの出来事が頭の中を駆け巡った。そう、俺は佐沢が襲われている所に飛び込んで……
「……！そうだ！佐沢、大丈夫なのか！？それと、男は！？あっ、痛っ……」
急にガバッと起き上がったため、腹に痛みが走った。
「矢賀くん駄目だよ！急に起き上がったら。うん。私は大丈夫だよ。男の人も、あの後私が警察に電話して、捕まえてもらったよ……」
「そっか……。よかった……」
俺は安心して力が抜けたのか、ベットに倒れ込んだ。
「……。ふぇっ…、えっ…。ご、ごめん…ね…っ」
「お、おい佐沢、何で泣いてるんだよ？」
佐沢は急に、ボロボロと大粒の涙を流して泣き出した。
「私の……、せいで……矢賀……くんに……大怪我させちゃって……」
佐沢は、自責の念からか、更に激しく泣き出した。俺は目の前で女の子が泣いてることにオロオロし始めた。
（目の前で女の子が泣いてる。俺は一体どうすれば……。うん。俺に出来る事はこれしかない…！）
俺は再びゆっくりと起き上がり、ベットの横で座って泣いている佐

沢の体を引き寄せ、抱きしめた。
「矢賀……くん……？」
「お前のせいじゃねえって。だから泣くなよ。な？」
俺にはこれしか言えなかった。

「ふぇっえっ…、えっ、うぇーん！！」
それから佐沢は数十分泣き続けた。

「落ち着いたか……？」
「うん。ありがと」
佐沢は、泣き過ぎたためか、目が真っ赤になっていたが、顔は笑っている。うん。大丈夫だ。俺は佐沢を抱きしめたまま、笑い返し……？うわぉ！俺さっきから佐沢の事ずっと抱きしめたままじゃん！！俺はとっさに佐沢の体を離した。
「ごめんごめん。さっきからずっと抱きしめたままだった。ごめん」
「え……？あっ……！うん……」
お互い、恥ずかしさの余り顔を背けてしまった。

しばらくの沈黙の後、不意に佐沢が声を掛けてきた。
「ねえ矢賀くん……」
「ん？」
俺は、声に反応して佐沢の方に振り向いた。

チュッ…

唇に柔らかく温かいものが触れた。佐沢の顔が俺に触れるくらい近くにあった。

これが俺のファーストキスだった。

佐沢は一旦顔を離し、今度は抱きついてきた。そして、俺の耳に囁いた。

「大好き……」

第七話：暴行事件編　（終編：First Kiss On Bed）（後書

最近、多少、話の創作に悩むことがあります。みなさん、是非、感想やアドバイス、希望などをお寄せ下さい。一つ一つ丁寧に御返事させて頂きます。よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第八話：夏休みの予定（前書き）

冬なのに真夏の話って……。ま、いいっすよね？

第八話：夏休みの予定

俺はあれから数日後に退院した。退院後、警察の事情聴取やら何やらで、しばらく落ち着けなかった。さらに、学校の方にも当然話は広まっていたが、各先生が生徒に、何も質問するなと言ったため、俺が質問責めにあうことはなかった。
まあ、俺がこんだけ大怪我をしたため、親父から心配の電話があったが、適当に受け流しといた。
俺の姉妹達は、俺が退院してからしばらくの間は、とても親切にしてくれた。とくに奈々と里沙は、どんな小さな事でも、親切にやってくれた。いやぁ、ホントに感謝します。

一番変わったのは佐沢だった。学校では今まで通りだが、二人になると、今までよりも積極的に俺と接するようになり、俺のことを慶大と呼ぶようになった。

そして、あの事件から二ヶ月後、とうとう終業式の日がやってきた。

「ちあ～」
「おう慶大」
「おはよう慶大くん」
翔太と葉月が挨拶してきた。あれ？我らが天使佐沢の声が聞こえない。　「おはよう！矢賀くん！」ああ、よかった。聞こえたよ。この声を聞かずして、俺の一日は始まらない。

「そういや、明日から夏休みだよなぁ」
「そうだよねぇ～」
「なぁ、夏休みにみんなでどっか旅行いかね？」

翔太が弾んだ声で言った。こいつ、以外とこういうの好きなんだよな。
「俺はいいよ。葉月と佐沢は？」
「あたしは別にいいよ。むしろ大賛成！」　「私も別に大丈夫」　「よし、んじゃ、この四人で……」
「「ちょ～っと待ったあ！！」」
鼓膜が破れそうなでかい声が聞こえた。教室ででかい声出すなっつーの！ほらぁ、何事かと皆さんがこっちを見ていらっしゃる。てか、声の主はだ……
「大樹！！それに奈々まで！大樹はまだ分かるとして、なんで奈々がここにいるんだよ！」
「いいじゃねえかよ。お前らが俺らに内緒で旅行の計画立ててるからいけないんだ」　「そうよ。ま、私は行っても行かなくてもどっちでもいいんだけど、どうしてもって言うなら……」
「ふ～ん。んじゃ、どうしてもじゃないから、お前は連れてかな……ゴフ！！」
「連れてきなさい……」
奈々が俺の腹にパンチ入れやがった。いってぇ。
すると、佐沢が不思議そうな目で俺を見てきた。そして俺の耳に囁いてきた。
「ねぇ慶大。その女の子誰？」
「ん？ああ、まだ話してなかった。俺の同い年の妹で、奈々っつーんだ。妹っつっても数カ月しか誕生日違わないけどな」
「ふ～ん」

「で！？何処に行く話をしてたのかな？」
未だに不機嫌な奈々が聞いてきた。
「いや。まだ別にまだ何も決めてねぇよ」
「ふ～ん。じゃあさ、湘南らへん行かない？」

「湘南！？めっさ混むぜあそこ」
俺は一度行ったことがあるから知っている。あそこの混み具合は半端ない。
「大丈夫よ。穴場知ってるから」
「んじゃ行こうよっ！私海行きたかったし！」
「私も行きたいな」
葉月と佐沢が賛成してしまった。もうこれで俺に勝ち目はない。
「わーったよ！翔太と大樹はそれでいいのか？」
「「おう！」」
はぁ。決まっちゃった。ま、別にいいんだけどよ。

こうして、湘南の穴場旅行が決定した。

（な～んか一悶着ありそう…。ま、いっか！）

第九話：湘南旅行！　（第一部：奈々の部屋で……）（前書き）

更新が少し遅くなってすみません。ここ数日、忙しい用事がありまして……。そのため、今回の話も、かなり短くなってしまいました。まあ、気にせず読んで頂ければ嬉しいです。

第九話：湘南旅行！　（第一部：奈々の部屋で……）

「ミーンミンミンミンミンミンミーン」
引っ切り無しに鳴く蝉、ジリジリと照り付ける太陽。

夏だ！！！！
休みだ！！！
パラダイスだ！！！！

そして今日は遠足！…違った、湘南へ旅行だ！！！

いつもは起きるのが苦手な俺も、今日ばかりは、目覚ましが鳴る30分前に起きたぜ！！俺はリビングへと降りて行った。
「おはよぉ」
「おにーちゃん！おはよっ！」
里沙がはしゃぎながら俺に抱きついてきた。いやぁ～、かわいいっ！！

「おはよう里沙！」
「慶大。朝ご飯出来てるわよ。食べちゃいなさい。あ、その前に奈々呼んで来て。まだ部屋に居るみたいだから」
「うぃ～す」
そして俺は、奈々の部屋へと向かった。

「ったく、早く降りてこいよな……。今日から旅行だってのに……」
俺はぶつくさ言いながら、奈々の部屋のドアを開けた。
「おい奈々。入るぞ…」

ガチャ。

ドアの前には着替え途中の奈々が……

「す～……ぴ～……」

……。寝てた。

「ったく、用意は昨日のうちにしてあるみたいだからいいとしても、旅行当日に寝坊って…」

「……ん～。ムニャ……お兄ちゃん……大好き……」

……。え……？

「奈々、まさか俺の事……。いや、あの奈々に限ってそんなことないよな。それにしても、奈々、寝顔かわいいな」

そう言って俺は、もっと近くで見ようと、顔を近付けた。その時だった。突然、奈々の腕が俺の首に絡まり、そして、お互いの唇が……

重なった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9918f/

桜の花びら舞う夜に

2010年12月22日15時00分発行